

審査の結果の要旨

申 智媛

本研究は、1990年代以降の韓国社会における学校像の模索過程に注目し、教師を中心とする学校改革の展開の特質と構造を探究している。韓国社会の変化と学校改革の背景を示した第1部第1章では、グローバル化時代のアジアにおいて韓国の学校改革を研究対象とする意義が示され、社会的政治的な条件と連動して教師と市民による学校改革のダイナミズムが形成された背景が示される。続く第2章では、改革のマクロな社会的文脈と改革の動機や方向のミクロな事実を媒介する教師の自律性による改革のネットワークというメゾレベルが対象化され、改革の複層性や教師の改革をヴァージョンとして捉える視点と総合的長期的視点による研究方法が提示されている。

第2部(1997-2009年)の第3章は、軍事政権から脱した民主化の高揚と経済危機のはざままで代案学校運動が成立し、その代表校であるE学校に「学びの共同体」が導入されて「民間教育と公教育の接続」と「公教育の革新モデル」が示された意義が考察されている。続く第4章では、民主化運動によって「理想の学校」が可視化されたこと、第5章では「学びの共同体」の受容によって学校と教師の自律性が喚起され、受験学力の問い直しから真正の学びが希求された経緯が、改革を担った当事者の語りの分析によって提示されている。

第3部と第4部は「革新学校」を中心とする公教育改革の始動と実践、および「革新学校」以降の「学びの共同体」の改革の進展が叙述されている(2009-2015年)。分権改革のもとで「進歩的教育監」が選出されて以降、「革新学校」が「学びの共同体」の改革を中心に「代案学校」と「小さな学校」の運動に支えられて進展する(第5章)。その普及は爆発的であり、2015年3月には13道市(全道市の8割)の1835校へと広がりを示している(第3部第6章)。第4部第7章では、F高校の「学びの共同体」の改革における校長と教師の語りが分析され、「韓国の常識を覆す教育革新モデル」を探求する校長の熱意と教室の学びの改革を探求する教師の創意によって推進される改革の様相が示されている。第8章では、改革を担った教師の経験を教師の変化に即して考察し、教師文化の変化が専門家共同体の同僚性を基盤として成立した事情を示している。

総括と考察を行った第5部第9章では、20年間の「民主主義的な学校改革」の基盤に、地域市民社会と教育行政と個別の学校教師の連携が機能していること、そして旧来のトップダウンかボトムアップかの二項対立を超える連携の構造が政策においても実践においても生み出されていることに注目している。そして「連携的学校改革」の課題として「教師の自律性」と「持続可能な改革」の二つの戦略的な課題の重要性が提起されている。

本論文は、複雑な政治的な文脈と社会の複合的な変化のなかで展開した韓国の学校改革のダイナミズムを俯瞰的に構造化し、同時に詳細な事例研究にもとづいて個別の学校改革の内部構造を描出して、学校改革という難解な対象を年代史的かつ構造的に描出することに成功している。その知見は日本を含むアジア諸国の学校改革研究に貢献するところが大きい。よって本論文は博士(教育学)の水準に十分に達しているものと評価された。